ScanSnap 導入事例 Vol.10

出版

ハードな編集作業を『ScanSnap』が大きく効率化

株式会社枻(えい)出版社『flick!』編集長 村上タクタ 様

さまざまな趣味の専門誌を手がける枻出版社（東京都世田谷区）でデジモノ雑誌『flick!』の編集長を務める村上タクタさんに、編集における『ScanSnap』の活用法を伺った。デジタル機器とウェブサービスの使いこなし方を満載して人気の『flick!』だけあって、編集作業も『ScanSnap』によって大幅に効率化されていた。

株式会社枻出版社 デジモノ雑誌『flick!』編集長 村上タクタ様

1992 年に枻出版社に入社して以来、趣味誌ひと筋に編集。バイク雑誌『RIDERS CLUB』を皮切りに、『コーラルフィッシュ』『RC エアワールド』の編集長も務める。機能を突き詰めたガジェット、アイデアに満ちた web サービスを紹介する『flick!』の編集活動に奮闘中。

「SV600」は校了の強力な武器、「iX500」は資料整理の必需品

編集部に 2 台の『ScanSnap』を常備

『flick!』編集部には「SV600」と「iX500」、2 台の『ScanSnap』が常備されており、いずれも編集長の村上タクタさんと 3 名の編集部員にとって欠かすことのできない存在となっている。特に数か月前に導入したばかりの「SV600」は、時間との闘いである編集作業の中でも最もハードな「校了」でめざましい働きをし、即、必需品の位置を確保したという。そのときの話から伺おう。

村上さんのデスクの横に「iX500」、共有デスクに「SV600」を設置。

校正紙を切らずに一発スキャン！

「先日、『flick!』と他の出版物を同時進行で編集することになり、編集部の稼働率が普段の 3 倍くらいになったことがありました。『SV600』がやってきたのはちょうどそのときです。藁にもすがる思いで使ってみたら、これがものすごく便利！ 赤字を入れた大きな校正紙をそのままスキャンして送れますから、作業効率が大きく上がって、思いのほかスムーズに校了を乗り切ることができました。実に強力な武器ですよ」（村上さん）

校了とは、記載内容の誤りを正したり、よりよい表現に修正したりしてページを完成させる、最終の校正作業のことだ。他部署のオペレーターが組んだページの PDF ファイルがメールで送られてくると、編集部で紙に原寸大で出力し、全員で読み回して修正指示の赤字を入れる。赤字が入ったらスキャンしてオペレーターにメールで戻し、再び送られてきた修正版に赤字を入れる。この作業は村上さんのオーケーが出るまで繰り返される。

ここで問題となるのが出力する紙（校正紙）の大きさだ。見開き単位で校正するため、一般的な A4 判の雑誌なら校正紙は A3 サイズ。赤字を入れたあと、普通のスキャナでは半分に切らないとスキャンできないため非常に手間がかかり、校了作業のブレーキになってしまう。だが「SV600」なら切らずにそのまま置くだけで「一発スキャン」が可能なので、効率が大きくアップするのだ。

「それ以来、通常の進行でも『SV600』を校正に活用しています。もう手放せない、編集部の強力な武器です」

校正紙に赤字を入れる。神経を研ぎ澄ませ、時間と闘いながら作業を進める。

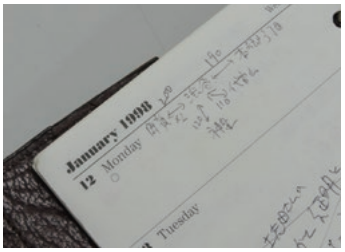
赤字を入れた A3 サイズの校正紙を置くだけでスキャン。
これは大きな効率化だ。

「Evernote」との連携が使いこなしのポイント

村上さんが『ScanSnap』を使い始めたのは、4年前に「S1300」を購入したとき。デジタル機器に造詣の深い村上さんにしては意外と最近の話だ。なぜなのだろう。

「僕たち編集者にとってスキャンといえば、印刷所で行う超高精度のものを指すのが普通です。そのため自分で書類をスキャンするという発想がなかったのが理由の一つ。それから、僕は物を捨てない主義で、昔の紙の手帳もまだ持っているし、データも過去に書いた原稿からPDA時代の電話帳まで、膨大な量をハードディスクに溜めています。ですから『ScanSnap』でドキュメントをどんどんスキャンすると、ハードディスクの容量が圧迫されて保管しきれないだろうと思ったのが二つ目の理由です。ところが『Evernote』が登場したことで事情が変わりました。『S1300』でスキャンしてデータを『Evernote』に入れるという方法で使ってみたところ、どれだけスキャンしてもほぼ無限に保管できるし(Evernote プレミアムアカウントは月に1GBまでアップロード可能)、検索して一発で探すこともできるので、『これだ！ パーソナルスキャナ、素晴らしい』ということになって（笑)、現在に至っています」

この「Evernote」との連携は現在、次項のように編集業務にも活かされている。『ScanSnap』で大量の資料類をスキャンし、編集部で共有するのだ。



昔の手帳もPDAも捨てずに保管している。
初代のパソコン以降のデジタルデータはすべてハードディスクの中だ。

捨てられない資料をスキャンして捨てる

村上さんのデスク横に据えられた「iX500」は新製品のリリースなど、原稿作成の資料となる書類のスキャンに大活躍している。

「編集部には資料が山のように集まります。そこにしか書かれていない情報もありますから、いくらネットで検索できるからといって、おいそれと捨てるわけにはいきません。でも『iX500』を導入したことで、やっと捨てられるようになったわけです」

原則的に資料は1か月ほど紙の状態で手元に置く。原稿の参考にするときには紙のほうが見やすい場合が多いからだ。その時期を

左：「iX500」で資料をスキャンする。
右：スキャン待ちの資料。1か月を過ぎたらスキャンして廃棄する。

過ぎた資料はスキャンし、『Evernote』にアップして編集部全員で共有してから廃棄する。こうすれば資料が散逸しないし、出先からも見たい資料にすぐアクセスすることができる。もちろんスペースの大きな節約にもなる。

「すごい速さでスキャンできる『iX500』はとにかく素晴らしい。やはり編集部には『iX500』と『SV600』の両方が必要ですね」

スキャンした資料は『Evernote』の編集部共有フォルダにアップしておき、全員がいつでも見られるようにしておく。

名刺をスキャンして「Eight」で管理する

もう一つ、村上さんがよくスキャンするのが名刺だ。編集者の手元には多くの名刺が集まる。それを「iX500」で一気にスキャンし、Sansanの名刺管理アプリ「Eight」に入れて活用している。

「名刺はデータ入力が面倒なので、ずっと紙のまま持っていました。それが『ScanSnap』と『Eight』でついに一挙解決です。スキャンして『Eight』に入れておくだけで、会社名や名前、メールアドレスなどをオペレーターが手入力してくれますから」

クラウド時代の到来とともに、『ScanSnap』は村上さんがさらにデジタルを使いこなすためのツールとして真価を発揮しつつある。村上さんのデジタルライフは今後さらに便利さを増し、それとともに『flick!』の編集内容もますます充実していくことだろう。

【著作権について】 著作権の対象となっている新聞、雑誌、書籍等の著作物は、個人的または家庭内、その他これらに準ずる限られた範囲内で使用することを目的とする場合など、著作権法で定められた例外を除き、権利者に無断でスキャンすることは法律で禁じられています。なお業務利用では、著作権者の許諾が必要となることがありますので、著作権法、およびご利用になる企業や団体で定める利用規則等に従って利用して頂くようお願いします。本事例におけるスキャンは、私的使用の範囲か、または、著作権法上問題のない資料等が対象とされています。

販売店

［お問い合わせ先］ 株式会社PFU　イメージング サービス＆サポートセンター
TEL：050-3786-0811
＜受付時間＞月～金曜日 10時～12時、13時～17時（当社休業日除く）
E-mail: scanners@ml.ricoh.com

ScanSnap に関する詳細はこちら
https://www.pfu.ricoh.com/scansnap/